



熊本支部報

(社) 日本山岳会熊本支部

No. 29 平成25年4月21日
 発行 (社) 日本山岳会熊本支部
 熊本県合志市豊岡 2000-810
 松本莞爾方
 電話 096-248-4485
 発行者 工藤 文昭
 印刷 ベストプロセス

目

1. 平成24年度熊本支部活動を振り返って・工藤 文昭
2. 永年会員になって……本田 誠也
3. 九州脊梁登山地図の制作について……永谷 誠一
4. 初めての雪山体験……原田 榮一
5. 再びインドへ……川端 浩文
6. 第28回全国支部懇談会に参加して……鶴田佐知子

次

7. 紅葉の山犬切周回の記録……安場 俊郎
8. 事業「今年も盛会だった新年晩餐会」・事務局
9. 事業「第8回登山研修会」……加藤 明
10. 事業「25年干支の山登山」……安場 俊郎
11. 会務報告(事業報告・委員会報告)……事務局
12. 事業案内……事務局

平成24年度熊本支部活動を振り返って

熊本支部長 工藤 文昭

平成24年度も会員の皆様のご協力のお陰で、これまでにない成果を残して終わることが出来ました。日本山岳会も、昨年4月1日から「公益社団法人」として新たなスタートを切り、全国各支部の活動も順調に無難なスタートが切れたようです。熊本支部としても公益法人として恥じないような新たな事業に取り組むことも出来た1年間でした。

・まず、1つ目は8月19日に鞍岳で行いました「第1回 SON 熊本(スペシャル・オリンピック熊本)アスリート会「ふれあい登山」でした。日頃から「NPO法人SON熊本」との交流がある廣永会員に、SON熊本に所属する知的障害者との「ふれあい登山」を主催していただけないかとの依頼がありました。これまで熊本支部としては障害者団体との交流経験もなく、引き受けるには一抹の不安もありました。しかし、障害者本人はもとより、ご家族の皆様の日頃のご苦勞を考えると、「支部としても出来る限りの協力をしなければならぬ」という結論は直ぐ出ました。まず、障害者の行動、障害の程度、SON熊本のこれまでの活動を把握し、それに対するサポートする側の対応の仕方などを十分に理解できるよう努めました。事前の打ち合わせ、登山する鞍岳の下見にもアスリートや保護者の皆さんにもできるだけ参加いただいただき、実際に一緒に歩いてみることで、「問題なくやれる」ということを実感できました。当日はアスリートの参加者は7名、SON職員、家族、大学生、高校生のボランティア27名、熊本支部員17名、合計44名の大会になりました。大津町で集合、開会式を終わり、鞍岳山頂東側駐車場に移動し、そこから鞍岳の頂

上に立ち、ツームシ山を登って駐車場に引き返す一周コースを歩きました。行動中は1人のアスリートに2人が付き添いましたが、時には両脇からサポートする場面もありましたが、全員頑張って2つの頂上に立つことが出来ました。登山道には野の花も咲き乱れ、花を鑑賞し、健常者と同様に感動されている姿は印象に残りました。

この日は朝から快晴に恵まれていましたが、午後になると入道雲が出始め、ツームシ山の北方に雷鳴がとどろきはじめ、早めに下山しました。参加者全員歩き通せたことをみんなで喜び合いました。大津町での閉会式では、アスリート全員が参加者の前に立ち、それぞれが自分の言葉で心底からのお礼の言葉を語ってくれました。保護者の皆さん、ボランティアの皆さんすべてが「やってよかった。」と大感激のようでした。支部会員にとっても、山登りでこんなに幸せを感じたことは初めてではなかったかと思えます。



・もう1つは、10月23日に行いました”勤労青少年ホーム健康づくり支援講座「はじめよう山歩き」です。これは熊本市からの要請を受けて、田北会員が窓口になり開催準備を進めてきました。初心者参加を想定して、登山の入門編の座学を2日、4コマ講義し、実技は俵山峠から頂上往復にしました。実技の当日は生憎の荒天でしたが、時間を遅らせ風雨が残る中で実施しました。昨日来の雨で足下も悪く、スリップし易い状況でしたが、それでも参加者は元気に登り続け全員登頂し、青年達は達成感に満ちあふれていました。座学の時から、勤労青年は仕事の疲れをあるだろうに、熱心な態度で講座に臨んでくれました。その後、毎年開催の要望も出ています。

・例会山行は、11回行いました。公益法人問題が始始めてから、登山教室や登山研修会など一般登山愛好者に参加を呼びかけていますが、リピーターも増加してきているようです。又、5年前から目標にしてきた九州脊梁山地の向霧立越の完全縦走も、大雨に見舞われ、途中中止したこともありましたが、実質3年目で北の小川岳から、南の眺子笠、不土野峠まで完全踏破することが出来ました。九州脊梁の自然の深さや、国見岳周辺は広範囲に樹木が立ち枯れしたり、鹿害などで森林の荒廃を実感しました。

又、今年度は阿蘇の草原を3回歩きました。阿蘇の草原は、千年を超える悠久の時代から、野焼き、放牧、採草などの人々の営みにより維持されてきたものですが、日本一の広大な草原の魅力を十分堪能させてくれました。この地域はあまり登山者が入れない区域でもありますが、阿蘇の雄大さと地形について確認できた山行でした。

・宮崎支部との交流登山 6月19日から2日間、宮崎支部との交流登山も7回目を迎えました。今回は宮崎支部の担当で歴史とロマン溢れる九州脊梁山地の霧立越で行われました。霧立越は九州でも最も魅力的な山域ですが、縦走となると



熊本からは交通の便が悪く、行きづらい所です。その問題も宮崎支部で解決してくださり、熊本から18名、宮崎から20名が参加しました。入梅直後にもかかわらず、2日間とも好天に恵まれ、緑滴

る森の命漲る霧立越の大自然の中で、宮崎支部との交流の心地よさを感じた素敵な交流会でした。25年度は、宮崎支部を天草の山に迎えます。

・森林保全巡視登山も鞍岳、大金峰・小全峰と2回行いましたが、この頃では登山者のマナーが良くなったのか、何の問題もありませんでした。現在本支部にも巡視員の有資格者は多数おられますが、巡視活動への参加が少ない様です。今後のご協力をお願いします。

・菊池水源流域の遡行も2回目でしたが、夏山の魅力一杯の事業になっております。

・24年度は各事業の参加者が増加したことは喜びに堪えません。宮崎支部との交流登山やその他の各事業とも多くの皆様にご協力をいただきました。これは支部の活性化に繋がるものですし、支部の纏まりと支部員としての喜びになるはずです。

・山の日制定と森づくり 山岳5団体主導の「山の日」制定運動も地方自治体、一部の国会議員の参加も始まり運動の広がりをみせております。本支部の取り組みはまだまだで、支部報26号で、「山の日」制定運動の趣旨説明をして、みなさんにご協力の要請を行ったくらいでした。しかし、日本山岳会の一支部としてはとっくに運動の取り組みをしなければならない時期になっています。現在、各支部の中でも「森作り」に取り組む支部が増えてきております。自らが森づくりに取り組みながら、森林での作業の中で自然を大切さを実感し、それを「山の日」制定運動に生かしていくことが、運動の大きな推進力になるのではないかとおもいます。支部役員会でも何回か検討しましたが、今、私達には森づくりの資金も、ノウハウもなく、まず、どこかの森づくりの団体にボランティアとして参加し、森づくりに関する学習をしようということになりました。調べてみますと、県下に森づくり団体は80くらいあるそうで、熊本市役所でも森づくりボランティアの養成も行われているようです。「山の日」制定運動も出来ることから取り組まねばなりません。まず、森づくりの体験から始めたいと考えています。はっきりした計画が出来たら皆様にご協力をお願いします。支部員、会友の皆さんの力を結集して、熊本支部の更なる発展を目指しましょう。



永年会員になって

5421 本田 誠也

いつの間にか日本山岳会在籍50年、我ながら驚いています。永年にわたり私を支えてくれた山岳会の諸先輩や熊本支部の皆さんに感謝します。

入会して多くの山と人との出会いがありました。今も心に残る山行は、悠然と山を楽しむ「今西錦司」先生を九州の山にむご案内したことです。このことで多くの人との出会いがありました。

(敬称略) 西堀栄三郎、山口政一、高木崎男、牧野 衛、石間信夫、望月達夫、大谷 優、脇坂順一、浅野清彦、吉村 毅、斉藤惇生、大塚博美、岩坪志茂子、西 孝子、小西利雄、坂井久光、能田 成、内田嘉弘、昌子夫妻、松本徂夫、酒井敏明、高遠 宏、大森薫雄、平林克敏、中村純二、新妻 徹、既に故人になられた方もいますが、永年のご交誼に改めて謝意を表します。

永年会員として熊本支部では、奥野正亥氏(第4代熊本支部長)西澤健一氏(第3代熊本支部長)馬場 猛氏、石井久夫氏(現在は宮崎支部)に次いで5人目の受章になります。私が熊本支部に入会後の行動概要を次に列記してみます。

- 1992~2000 第5代熊本支部長
- 2001~2005 (社)日本山岳会評議員
- 1998~2001 熊本支部設立45周年記念事業
(熊本県境436kmを歩く)
- 2004~2005 日本山岳会創立100周年記念事業
(中央分水嶺を歩く 延長180km)
- 2005 新日本山岳誌の編集分担
熊本57座 鹿児島10座
- 1996 奥野正亥氏・名誉会員になる。
- 1997 熊本支部設立40周年記念集会
40周年記念誌の発刊

山岳会のヒマラヤ登山隊に馬場博行会員を送る。

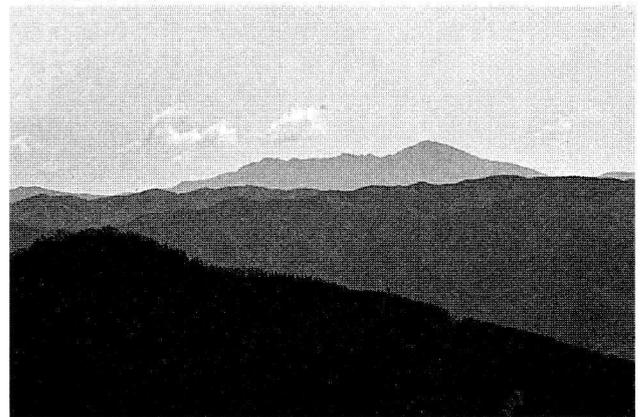
- 1988 日・中・ネ三国友好登山隊
チョモランマ/サガルマータ
8840m 北側隊員として8200m到達
チョーオユー(8201m)
無酸素登頂に成功
- 1995 日本山岳会マカルー(8463m)
登山隊に参加、東稜ルートより
登頂パーティのサポート
- 1992 夏、支部設立35周年記念カナデアン・ロッキー登山隊 7/18~7/2
隊長 工藤文昭(現支部長)
ほか隊員9名 アサバスカ峰登山マ
リーン湖のクルージング、ロブソン
ランチからキニーレイクハットまで
のトレッキング。

私が日本山岳会に入会したのは昭和37年5月です。36歳の時でしたから、これは60歳代以降の記録になります。

九州脊梁登山地図」の制作について

12909 永谷 誠一

皆さんのお手元に届いていると思いますが、日本山岳会会報「山」、第814号トピックスとして、「九州脊梁登山地図作製」に掲載されている記事をご覧頂いたと思います。事の起りは、「山」編集委員の奈良千佐子さん(友人)に案内地図が刷り上がってすぐ、それを一部送っておりました。後日、奈良さんより、地図作製にあたっての動機なり、又、まつわる記事を送ってほしいと原稿依頼があり、早速、工藤支部長に相談したところ「いいでしょう」ということで、急いで書いて送ったところ、3月号にトピックスとして掲載された次第です。その対応の早さに驚きました。九州脊梁山地の紹介は地図を通して宣伝されましたが、反面、事の大きさにも自省せざるを得ません。一人でも多くの方が、この秘境に足をを入れて頂き、自然が一杯の脊梁山地を縦横に歩いて活然の気を養って頂くとの思いからでした。玄関口である山都町は無論のこと、隣接する五ヶ瀬町・椎原村・八代市泉村・五木村・水上村のこれの関係する方々と協議し、早急に受け入れ態勢づくりが急務となった様です。



アクセスの解決方法や有料ガイドの養成等々、難題が多々ありますが、やり抜く以外はありません。ところで、手始めに宮崎支部との合同で、全国支部に働きかけ、まず、日本山岳会内での九州脊梁登山大会(仮称)なるものを開催し、全国より愛好者の皆さんを受け入れてみてはどうかとの提案です。広範囲ですから、地域を5ブロック位に分けて、それぞれにリーダー(ガイド)を設け、案内できたらと考えております。どのブロックも2泊3日、3泊4日の行程です。宿泊所も考慮しなければなりません、どうしても山中泊が必要な際は、別の施設班がテント設営等のようにしたとしても思っています。これはあくまで私案です。熱気ある熊本支部の皆さんで是非実現して頂ける様に願ってやみません。

初めての雪山体験

14213 原田 榮作

期日 平成25年3月14日(木)～17日(日)

一度は経験したい冬山登山、冬の雪山にも一度は登ってみたいと前々から思っていたが、冬山登山の遭難事故がマスコミで報道されるのを見て、「冬山は危険」という先入観が強くあり、実現できなかった。たまたま正月に山の案内書を見て、新穂高温泉から西穂高口駅までロープウェイがあり、その後約1時間30分の登山で西穂山荘に行けることを知った。更に西穂山荘からの眺望は天下一品とも書かれていたので是非行って見たいという思いに至った。西穂山荘に泊って雪山を眺めるだけで帰るか、西穂丸山まで行くか、更に西穂独標まで行くかはお天気次第、積雪次第で決めようと思った。妻に話すと、「危ないから、冬山はやめたほうがいい。自分は行かない」と言う。かって10数年前の夏場、妻は親戚の者だちとこのルートを通して西穂独標まで登ったことがあるからその素晴らしさを経験していた。また、平成18年8月には、妻と一緒に上高地・潤沢経由で奥穂高岳には登ったが、それから先のジャンダルムや天狗ノコルは素人には危険と言うことで西穂高岳までは行かずじまだった。そのような理由で今回は私ひとりで登ることにした。



3月14日(木)、熊本空港発のJALで大阪伊丹空港に行き、その後新幹線で名古屋駅を経由して、JR特急ワイドビューひだで飛騨高山駅に行った。翌15日の朝9時、レンタカーを借りて、カーナビに「新穂高温泉駅」を入れて走った。1時間ほど走り、急カーブして脇道に入った。道路は狭くどんどん雪が深くなり、スリップしないかと慎重にゆっくり走った。雪が路肩付近ばかりでなく道路全面に真っ白く積もっているところに差し掛かったと思ったら、「これより先全面通行止め」の標識にぶち当たった。仕方なくUターンしてカーナビを入れ直して新穂高温泉に着いたのは10時30分だった。カーナビは、第2ロープウェイの「しらかば平駅」の方に案内していたのだと後で分かった。標高970mの新穂高温泉駅から第1ロープウェイ、第2ロープウェイと乗り継いで、2156mの「にしほたかぐち」に11時30分に着いた。屋外に出ると真っ白の雪景色がまぶしくて新

穂高温泉駅で買った500円のサングラスが役に立った。展望台には、大勢の観光客がひしめいていた。天気は快晴で、温度計はマイナス6度を指していた。真っ白く雪を被った常念岳とか焼岳とかがすぐ近く、目の前に見えた。西穂高岳の先の方には槍ヶ岳の槍の穂も少しだけ顔を出していた。このように素晴らしい雪山を見たのは初めてだったので何度もシャッターを押した。中に、ザックを背負った登山者らしい人が5～6人いたので心強かった。展望台から一通り眺めた後、いよいよ登山にかかることにした。「西穂山荘へ」という看板が立てられていたので少しは安心だったが、1時間半の行程だから念のために西穂山荘に、「アイゼンだけしか持たない素人登山者でも登って行けるでしょうか」と携帯電話を入れたところ、「トレースを辿って登って来れば大丈夫」という返事だった。登山時間としては遅いせい以前には誰もいなかったし、後ろからも誰も登って来なかった。竹に赤い布を巻いた目印が50m置きくらいに立てられていたので道に迷う心配はなかった。ところどころに50cmくらいの深さの足跡が残っていたので入り込まないように注意した。初め30分くらいは比較的ながらかな下りだったが、谷と思われるところからは急な上りに差し掛かった。

「冬山登山道」という標識が立ててあった。夏場のルートは別にあるのだろうと思った。樹林帯の中をほぼ直上する登山道だったので雪崩の心配はなかった。6本爪のアイゼンだったが何とか間にあった。寒さ対策で着て行ったダウンの上着の前ボタンを外さなければならぬほどに汗ごもって来た。登り詰めた尾根に建っている西穂山荘は予想していたより大きかった。12時45分の到着だった。コースタイムより15分速かった。

視界360度の眺望



山荘前では数人の登山者が出入りしていた。私は宿泊の手続きを済ませ、ザックを置いてねぐらを確認した後、早速丸山に登ることにした。人それぞれで、これから登ろうとする人も数人いたが、反対に下りてくる夫婦とか単独の人の方が多かつ

た。一面真っ白に積もった雪の上を歩くのは何とも爽快だった。フード付きのダウンの外套を着ていたので体は寒くなかったが、写真を撮る時に手袋を外した手は切れるように痛かった。雪の積もった尾根状のところを登って行くのであるが、先客のアイゼンの跡が付いていたので道に迷う心配はなかった。ところどころ強風に雪が吹き飛ばされて大きな岩がむき出しになっていた。だんだん標高が高くなるにつれて風は一段と強くなった。帽子どころか油断すると体全体が吹き飛ばされそうな強さだった。下りてくる人に、挨拶代わりに、「どこまで行かれましたか」と尋ねると、「丸山で引き返しました。それから上は風が強くて無理でした」と言う人がほとんどで、中に1組の夫婦だけが、「独標まで行きましたが、風の道らしくそれから先は行けませんでした。」と言われた。私は、今回は初めから丸山までと決めていたので、とにかく風に注意しながら登った。立ち止まっては周囲を見渡し、立ち止まっては周囲を見渡しして雪景色を眺めながら2452mの丸山に何とか辿り着いた。山頂は小さな丘状になっており、「西穂丸山」の標柱が立ててあるだけだった。上空は雲一つなく青々と晴れ渡っており、周囲は360度視界が開けていた。熊本の空のように、どんよりとした冬空でもなく、春霞もなければ、黄砂によるどろ色の空とは比較にならないほど真っ青に澄んでいた。下方には、上高地の大正池とか、赤い屋根の帝国ホテルとか、河童橋などが見下ろせた。間もなく1人の登山者が独標の方から下りて来た。埼玉から来たという人で、「定年退職後から登山を始め、百名山を目指している」と言われた。「阿蘇山も九重山も既に踏破しました。現在60座を超えたところです。2月には八ヶ岳の赤岳にも登りました。6月にはまた九重山のミヤマキリシマを見に行こうと思っています」と、初対面にしては話がはずんだ。私か、「シャッターをお願いします」とお願いしたところ、その人も「私もお願いします」と言われ、交互にシャッターを押し合った。その人と会話しながら一緒に下山するのは、この素晴らしい雪景色がもったいないと思ったので、その人が下山されようとした時、「私はもう少し周囲を眺めてから下ります」と一緒に下るのを断った。北には西穂高岳・奥穂高岳・槍ヶ岳・常念岳南側には焼岳、その奥に乗鞍岳、西側を見晴らすと中央アルプスの山々、そして東側には霞沢岳笠ヶ岳などが雪を被っていた。何度も周囲を見回しながら雪山を満喫した。常念岳と笠ヶ岳にはまだ登っていないので、この夏には挑戦しようと気持ちが高ぶるのを覚えた。他に登山者のいない丸山で何度も周りを見回した。

雪山でのテント張りの講習

丸山から帰って来たところ、山荘の前で15～16人の人たちが群れをなしていた。その中には

30歳前後と思われる若い女性と60歳前後の女性2人も混じっていた。みんなサングラスをかけていたが、よく見ると顔は雪焼けしている風で、赤黒い顔だった。雪山に登る女性は顔なんか気にしないのだらうと思った。一行は何をしているのだらうと傍で見てみるとテントの張り方の講習だった。どうやら山岳ガイド付きのグループのようだった。ガイドらしき40歳前後の屈強な男性が輪の中心にいて盛んに説明していた。風の強い雪原だったので大きな声で回り構わずに説明をしていた。私は2～3m離れた位置で突っ立ったまましばらく目と耳を傾けた。講習の内容は雪山での簡易テントの張り方だった。「ストックを屋根の両方に立て、紐で左右に引っ張る。その後、あり合わせの物でテントを膨らませて、裾に雪を被せて上から踏みつけると風が中に入らない。これで風は防げるが、中を温めるためには携帯コンロを炊くか、出来れば前もって大きなローソクを用意しておいて火を点けるとテントの中はずいぶん暖かくなる」。講習を受けている人たちが順番にテントの中に入って、その暖かさを確認していた。出てきた人は皆口々に、「暖かい」と感心していた。「最初、テントを広げた時に、風に吹き飛ばされないようにするのが大変だ」と念を押していた。

「冬山でのテント泊まりで次にするごとに雪を溶かしての水作りだ」と言っていてアルミ鍋に山盛りにした雪を携帯コンロで溶かす実験だった。飲み水用、歯磨き用、顔洗い用、調理用と多くの水が必要だと言われた。その山岳ガイドは、「自分は学生時代から山荘に泊まったことはない。いつもテント泊まりで、山岳ガイドになってから山荘に泊まるようになった。テントの方が誰にも左右されず、誰にも迷惑を掛けることがないので、今でもひとりで登山する時は必ずテントを持って行く」と言われた。更に、「山登りの本当の楽しさは、ひとりでテント担いで気ままに行くことだ」と自慢げに話をしておられた。この団体は、翌朝、ストックではなくピッケルを持ち、ザイルを担いで独標の方へ登って行かれた。「西穂高から奥穂高に行く予定だ」と中のひとりが言われた。

山荘前の広場にはテントが5張り張られていた。山荘の入口を入った左側のテーブルでは、50歳前後の夫婦がアルミ鍋でお湯を沸かして、インスタントラーメンを食べていた。この人たちは外のテント泊まりの夫婦だらうと思った。

朝も好天で西穂独標近くまで登る

翌日も好天に恵まれた、山荘の主人が、「日の出は6時5分頃」と言われたので、人並みに日の出をカメラに収めようと思い、5時30分に起きた。昨晩は9時の消灯からも、トイレに行く人がいたり、イビキをかく人がいたり、寝言を言う人がいたりして熟睡することは出来ず、ただまんじりとしていたので、起きたというのは床を離れたとい

うことであるその日は10畳の部屋に7人で寝ていた。1畳2人では寝返りも出来ないが思うと思った。その日は金曜日だったけれども7人だったので幸いだった。若い2人はまだ床の中、他の4人は既に布団を畳んで姿はなかった。昨晚、「丸山で日の出を見たい」と言っておられたので、今頃はもう登っておられるのであろう。山荘の冬は、水道管が凍ってしまって、顔を洗う水もなければ、もちろんトイレ後の手洗いの水もなかった。必要であれば、山荘が溶かした雪永をペットボトル1杯200円で購入するしかなかった。私は持ってきたペットボトルのお茶で口をすすぐ程度にした。山荘の前では3脚を立てカメラをセットして待機しているひとが10人くらいいた。東の空かだんだん明るくなり、左手の木の向こうから太陽が顔を出した。6時6分位だった。私も、一応平成25年3月16日の日の出をカメラに収めた。

朝食を済ませて、直ぐに下山しても良かったが、この好天気はこのまま直ぐ帰るのはもったいない気がしたのでザックを山荘に預けて、また丸山に登ることにした。写真は昨日たくさん撮ったので今朝はこの雪景色を目に焼き付けておこうとじっと見とれた。途中、腰の曲がった女性と背の高い男性の2人がゆっくりゆっくり登って来た。「相当のご年配のようですが」と話しかけると、女性の方が、「私か71歳、主人が72歳」と言われた。更に、「夫婦で山に登るのは健康づくりにいいもんです。月に1度はどこかの山に登ります」と言われた。71歳にしては奥さんの方が髪は白く、腰は曲がって老けて見えたが、それでも夫婦連れで冬山に来られる気力体力に感心させられた。山登りは、時間さえかければ80歳くらいまでは大丈夫だろうと意を強くさせられた。昨日と同じように丸山まで行き、更に独標までと思い立ったが、相変わらず風が強く、前にも後にも登山者が見えなかったので30分くらい登って引き返すことにした。時間はたっぷりあったので、止まっては眺め、止まっては眺めして雪山を満喫した。

今回の初めての冬山は登山と言えるにどの登山ではなかったが、冬の雪山を経験して本当に満足だった。何より天候に恵まれた。山荘の主人は、「このように朝から夕方まで、2日間も快晴の日は珍しい。たいいてい午前は良くても午後になるとガスがかかったり、雲に覆われたりして遠くは見えないのですが」と言っておられた。因みに、熊本に帰った翌日は、天気予報によると全国的に雨もようだった。また、下りのロープウェイには、「18日から1週間は、保全のために運休します」という張り紙かおり、これも幸運にも恵まれた。

悪天候の場合を考えて1日余裕を見ていたので、帰路、白川郷までレンタカーを走らせて合掌作りの民宿に泊まり、世界文化遺産にも触れることも出来た。

随想

「再びインドへ」

9328 川端 浩文

去る2月24日から3月5日まで10日間の海外ツアーに参加した。目的はあまりJACとは関係ないかもしれないが、全く関係ないわけでもないで紹介したい。その目的はインド八大仏跡参拝である。しかし、いずれの宗教もどうしたわけか山と深い関係がある。近代登山がスポーツとして始まる前は世界各国で山は霊山として信仰の対象であった。国内でも比叡山、高野山、富士山、身延山、御嶽山等々数え上げれば枚挙にいとまがない。仏教の世界観では世界の中央に須弥山があり、高さは8万有余で頂上に宮殿があることになっている。およそ5年前に妻と今生の別れをした後、一時精神的に落ち込み、五里霧中の時があった。その時縁あって仏教の勉強を本格的に始めることになり、以来3年間通信教育の学生となった。今夏のツアーはその集大成とも卒業旅行ともいえるものであった。八大聖地の中で特に山に関係があるのは霊鷲山である。ここは観経や法華経をお釈迦様が説かれたことや、その麓の竹林精舎で寝泊まりされたことや、近くの王舎城での悲劇の物語が有名である。



この山は灌木の茂った岩山で急山道をおよそ30分で頂上に至り、360度の景観を楽しめる。頂上は平らで4畳半程あり線香の煙が絶えないほどの聖地である。駕籠で登る人、歩いて登る人、五体投地で登る人、道中の洞窟で経文を唱える人修行の装束を着た人がそれぞれの思いを胸に上り下りしていた。われわれも頂上で野生のリス達に見守られて読経したり有志のお説教を聴聞した。

20数年前、今回とは違った目的でインドを訪れたことがあった。その時の忘れられない経験が脳裏に浮かんで参加を一時ためらった。しかしその心配はないことが分かったので参加したが、今回もまたいやな経験をする羽目になった。前回は帰国直前から体調を崩し、帰国後は起き上がれないほど疲れ果てた。診察の結果は肝炎だった。以

来数ヶ月に及ぶ通院、点滴治療となった。今夏は5日目に発熱と下痢にかかった。幸い参加者の方々の助けを借りて一晩で回復した。以後数日は持参のスポーツドリンクと行動食の食事で、まるで人体実験のような日々だった。とりわけ途上国への旅行は要注意である。最終日は釈迦の生誕の地、ネパールの地へ移動した。ルンビニー園訪問は勿論であったが何よりも最高の経験はエベレスト周辺の遊覧飛行であった。カトマンズからおよそ1時間、ヒマラヤ山脈の山々が太陽を浴びてきらきら光る光景はまるで天国を遊泳しているようであった。途中体調を崩して地獄の中にいるような最悪の事態を想像したときもあったが、この素晴らしい遊覧飛行のお蔭で終わりよければ全てよしとなった。



持続可能な社会を目指して～。講師は千葉県立中央博物館副館長の中村俊彦氏。彼の話は面白く、この日本列島の中央にある房総半島、ここは暖流と寒流がぶつかる所なので常緑広葉樹林帯と、北に広がる落葉樹林帯の移行部にあたり、肥沃な土壌条件に恵まれた豊かなところだそうである。高い山はなく、200m～400m、地盤のほとんどは砂層が交互に重なり湧水も多いそうだ。海ではシャコタナゴが国の天然記念物、シャープゲンゴロモドキは絶滅危惧種だそう。黒潮は12℃を超える暖流なのでカツオ、マグロなど多くの海の幸をもたらすそうだ。そして太平洋海岸側では千葉県だけにトキがいるとのこと、そして千葉には生物が32900種もあって世界一だとか。専門家のお話だけに非常に感銘した。



2012年日本山岳会

第28回全国部支部懇談会に参加して

(会場：千葉県・サンライズ九十九里)

9649 鶴田佐知子

10月20日(土)朝8時20分、東久留米市の娘の家を出て、バスは西武池袋線のひばりヶ岡に向かう。天気はいいようだ。駅前で昼食のおにぎりとお菓子を買い、池袋行きの電車に乗った。

池袋でJR線に乗り換え東京駅に向かう。東京駅の八重洲北口を出て200m程行くと、三番乗り場には黄色いコートの千葉支部の案内人の方と、沢山の山岳会員が待っていた。11時過ぎ大きなバスがやってきた。工藤支部長もおられてバスに乗り込む。バスの中で昼食を摂り、1時間ほど走り続け、12時12分、会場の「サンライズ九十九里」に着いた。

受付で部屋番号を聞き、401号室荷物を置き、1階の多目的ホールで会期中の注意事項を聞く。

14時30分、多目的ホールで記念講演会が始まった。演題は「房総の自然と里山里海」～生物多様性豊かな

講演会の後15分ほど休憩があり、16時～16時45分郷土芸能公演があった。初めに九十九里町長の挨拶があり、小学生12名がかわいい鎌倉子舞を踊り、次に“鈴の舞”、後ろの子供たちが獅子の頭の布を上げたり下げたり、なかなかユーモアがあり盛り上がった。次の“したての舞”では獅子の耳を踊りに合わせて動かし盛り上がった。そのあと“大漁節”があり、リズムカルに踊りながら退場した。実に楽しい公演だった。この後18時まで自由時間、入浴、おしゃべりを楽しみ、懇親会が始まった。席は“くじ引き”で90番。視界は千葉支部、副支部長の三木雄三さん、まず支部長の篠崎仁さんの主催者ご挨拶、次に来賓あいさつ、日本山岳会会長の尾上昇さん、次に九十九里町長川島伸也さん、そして前千葉県知事の堂本睦子(日本山岳会理事)さんの乾杯で楽しい懇親会が始まった。飲んだり食べたり実に楽しい2時間だった。中締めは、副会長の吉永英明さん。私は明日21日は九十九里浜の三班、朝食は6時30分との話で楽しい懇親会は終わった。

21日、グループには山のグループと海のグルー

プの二つがあった。私が海グループの九十九里浜を選んだのには、私なりの理由があった。私は子供の頃、東京の多摩川近くに住んでいた。小学六年生の時は、千葉の岩井海岸に一週間の臨海学園宿舎に泊まり、泳ぎを覚えた。大学の卒業論文は装飾古墳をテーマにしたので、佐倉市の国立民族博物館に何度も通ったし、仲良しだった友人が千葉市緑区に結婚して家を建てたので、何回も遊びに行っていたが、九十九里浜だけは歩いていなかったのだ。

出発は8時、10分ほど歩くと、ホテルのすぐ裏に知恵子抄の詩碑があり、道路の下の道へ出るとすぐ海、雲一つない海岸の砂地を歩くと、緑色の糸で小さいキンチャクガニを取っている男性に会った。

足を含めて210cm位のカニで、小さいのが美味しそう。工藤支部長もこのコースに参加のようだ。太平洋の波がたち、日曜日でもあり、満潮もあって、サーフィンをする人が多い！ また砂地にテントを張ってキャンプをしている家族もたくさん、9時ごろ、文豪徳富蘆花の文学碑があった。波は非常に高いので泳ぐにはちょっと怖いかな！ 9時25分、トイレ休憩。10時14分、伊能忠敬記念公園で弁当を頂き、2.5kmほどバックして、一等三角点を通り、子安神社も通り過ぎて、10時30分ころ昼食。このあたり宮を出て海側30本ほどの赤松は全部枯れていた。

11時出発、とべらの実、シロザも多い。11時5分頃、竹久夢二作詞の“よいまち草の碑”があった。11時15分、桜並木の土手のコスモスを見ながら橋を渡り、次はなかよし橋。この川は二級河川の作田川とか。このあたりは海から32.5km、セイバンモロコシ、クズ、細い竹藪の道、左に曲がると左側は白いソバの花がいっぱい！ 更に進み12時ごろ、伊能忠敬生地の記念碑があった。その次の橋の向こうは、白くなったススキの細い道、シダレヤナギもあった。12時15分、宿の車が迎えに来た。その車で12時30分宿へ、今回の九十九里浜歩きは終わった。

帰りは早い。13時53分のバスで東京駅へ。今回の千葉での支部懇談会は終わった。来年は静岡だそう。最後になったが、千葉でのお土産は、ピーナツと赤で千葉県形の描いたバッジだった。



紅葉の山犬切周回の記録

13889 安場 俊郎

2012年10月20～21日の土日、秋晴れの日が続くと天気予報に、かねてから行きたかった、山犬切～水上越～白鳥山の稜線を通ってみることにした。

この山域は、林道川口線が車の通行が可能だった頃は、手軽に訪れることのできる山だったが、2回にわたり道路面が崩落したため以後、復旧工事が行われないうまま、気軽に行けない山域になっていた。最近、五木久連子線の広域林道が開通したため、石楠花峠直下のトンネル付近から登り、往復する登山者が多いようだ。



○ 日程及びコース

- 1 日目 樺木地区横平登山口～上福根山～北山犬切～林道川口線 テント泊
- 2 日目 林道川口線～七遍巡り～南山犬切(往復)～水上越～白鳥山～峰越峠

10/20 5:15 自宅出発 途中、コンビニで永谷氏監修「五家荘登山地図」の山域部分をカラーコピーする。8:00 峰越峠着 車回収のためのバイクを荷台から降ろし、水切れで到着したときに備えて20をバイクと共にデポ。樺木に引き返し、横平からの林道に入る。民家を過ぎてしばらく車で上ると悪路になったため、登山口の手前に駐車し、登山口まで15分ほど歩く。北にウードヤ山と五家原岳の稜線の林道が見える。

9:52 上福根山登山口。急坂の登りが始まる。リュックの重さはさほど感じない。水3ℓと、テント、食糧1日分で17キロぐらいだろう。杉植林のジグザグの登りを過ぎると、1時間ほどで自然林の中の尾根道になる。このあたり1400mほどでモミジやカエデの紅葉が鮮やかだ。鈍頂の白鳥山や2週間前に脊梁縦走登山で歩いた国見岳をはじめ脊梁の山々を望みながら、ゆっくり歩いて、13:14

上福根山の頂上に着く。誰もいない。20分程休んで、東へ尾根を下り始める。ここからは私には未知の領域になるので楽しみである。

尾根は灌木があるだけで見晴らしがよい。鹿が食べないトリカブトの群落を踏みつけて歩く。踏み跡ははっきりしないが、忠実に尾根筋を歩けば道迷いの心配はない。前福根山から下福根山を過ぎると、一本樫登山口分岐の標識がある。あとで調べてみると、この登山口は一般登山道ではなく、樅木から上がる車道の入口にはゲートがあって、地元の人が緊急的に利用する登山道とのことである。この後すぐ北山犬切の分岐で、リュックを置いて往復する。片道5分 15:32 山頂着。



16:00 廃道になっている川口林道に着く。林道を東に下れば営林署の小屋があり水が流れているとの情報を確認するため、20分程林道を東に歩いて捜しに行くが、どの沢も枯れていた。小屋も撤去されていたのか広場があるだけだった。引き返して林道脇にテントを設営した。この場所は携帯電話使用可能だったので、廣永会員に現況報告を兼ねて、水場の情報を聞いたがわからないとのことだった。

すぐ暗くなったので、テント内で夕食。炭火焼鳥バックをポイルし、缶ビールで一人乾杯。ウイスキーで仕上げ。アルファー白米とレトルトカレーを食べて夕食とした。水節約のため歯ミガキせず、19時頃就寝。鹿の鳴き声があったが、風はなく静かな夜で、久しぶりの満天の星を鑑賞した。山の夜はよく眠れるようである。

10月21日

5:20 起床。昨夜の白米の残りをオジヤにして、サンマの缶詰で朝食とする。

節約したおかげで水の残量は20ある。ラーメンを作っても峰越峠まで十分だ。

7:25 出発、七遍巡りまではゆるやかに登っていく。

すがすがしい天気、紅葉も見ごろ。本当に気持ちがいい。誰もいないので山独り占めの気分である。8:02 七遍巡り頂上着。

のっぺりした山体で、なるほど、方角を間違えると、迷いやすいのが頷ける。踏み跡は南山犬切方面が明瞭で思わず頂上まで行ってしまっ引き返した。反対に、水上越方面の踏み跡は不鮮明で、赤テープも少なく、ルートを決めにくい、方向を間違えないよう尾根を伝えれば問題はない。スズタケが枯れてずいぶん時間がたっているようで、どこでも容易に歩ける。幼木は鹿に樹皮を剥がれ全部枯れている。スズタケを食い尽くし、鹿も必死に生きているのだから、地面は裸地となり、球磨の白髪岳のように禿山になるのも近いかもしれない。途中、石灰岩の山の特徴である直径10m程のドリネを3か所見た。北側は緩やかな斜面で、平地もあり、幕営適地が多いが、水は得られそうもない。南側は急斜面だ。

9:22 水上越 標識がある。現在、水上村からの道路は通行止めで登山口まで車では入れないとのこと。そのまま通り過ぎる。1514mのピークを下り始めたところで、男性が一人きた。峰越峠から水上越の往復だそうで、私のバイクを見たとのこと。横才峠には標識がなかったようで、場所はわからなかった。GPSが電池切れで位置が特定できなかった。そのまま、斜面を登っていくと、白鳥山と時雨岳を結ぶ登山道に出て、左へ5分で白鳥山の頂上に着いた。登山者が数人休んでいたが挨拶をして休憩せずにそのまま御池へ下った。ドリネの広場は金網のフェンスに囲まれていて立入禁止になっているので、以前の記憶を頼りに東に巻いて峰越峠に向かったが、踏み跡がない。フェンスの北側を西にたどると登山道があった。正解は西に巻くようだ。丁度昼時になったので、インスタントラーメンを作り昼食とする。30分で峰越峠到着。バイクで横平の車を取りに行く。天気に恵まれ、快適な周回登山だった。



回想の山”短歌に寄せて“

8605 門脇 愛子

今年は特に雪が多く、北海道では大分被害も出たようですし、九州も例年よりは多かったようですが、それでも以前に比べたら少ないのではないのでしょうか。一昔前までは、九州でも結構冬は積雪を楽しめたものです。大先輩のIさんが“九州でもこのような大雪、雪質の所があるのか”と喜ばれた冬山。それは昭和49年(1960年)の福岡県の雷山、井原山縦走の事でした。当時は毎年正月3ケ日、九州内のどこかの山に登っていたものです。先日身近整理をしていて、古い歌詩を発見、その中からの回想の山です。

☆ 元旦に、新しき雪踏みしめて
今年の山行幸祈りなり

☆ しめ飾り 日の丸もある 我がテント
屠蘇気分満つ 山の元旦

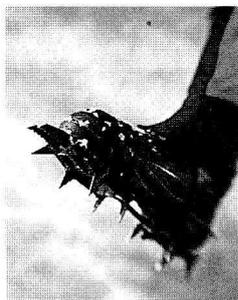
初日「1月1日」思わぬ積雪でバスが行かず、雷観音から登山口まで歩くことになり、キャンプ場で幕営。2日目スキー場から稜線に出るとものすごい風で、冬山の厳しさを感じる。前者の足跡がない程風が吹き、雪煙が舞う。雷山頂上では記念写真を撮るのが精いっぱい。ここからアイゼンを着けて井原山に向かう、初めは膝まで雪があり、やがて腰まで、そして胸までのラッセル、とても行けそうにない。500mほどで断念、引き返す。初めての経験。キャンプ場で露営。翌日金山へ向かう。積雪は腰まであり、道がよく判らない。頂上まで30分という表示板の少し上で引き返し決断(中略)

☆ 稜線は 雪煙巻いて今記せし
我が足跡を 吹き消されゆく

☆ 頂上は 目前なれど雪深し
時間切れなり 再登を期す

☆ 腰までの 由紀に阻まれ潔く
引き返すも 登山者の道

5首潮音歌会歌詩“轍”昭和49年2月号より



☆ 今年も盛会だった「新年晚餐会」

- 期日 平成25年1月19日(土) 15時より
- 場所 熊本市下通 「紅蘭亭」
- 参加者 菅 隆雄・本田誠也・工藤文昭・松本莞爾・門脇愛子・鶴田佐知子・加藤稜子・廣永峻一・石井文雄・永谷誠一・加藤 明・安場俊郎・木曾萬喜治・田北芳博・横尾健二・千々岩泰子・松岡栄治・松岡啓子・中林暉幸・池田清志・橋本悦子・金山春男・原田栄作・斉藤弘毅・植木隆俊・植木啓子・舛田レイ子・松島義幸・椿 千鶴・中田良友・井上恵美子

※ 松の内も過ぎた1月19日の土曜日の15時より、恒例の支部新年晚餐会が市内の「紅蘭亭」で行われた。本田名誉会員のご挨拶も頂き、支部



長の新年の挨拶、そして永谷会員の乾杯で、賑やかに宴が始まった。今年本田会員や永谷会員門脇会員などのベテランと昨年会友として支部会員になられた新人の皆さんが多数参加され、山の歌などの余興はなかったもの、自己紹介を兼ねた「山」の話や、山を始めた動機や、思い出の山行の紹介など、日頃あまり聞けない面白い話がありました。予定の時間があつという間に過ぎ去り、最後には門協会員の「万歳三唱」で盛会の中楽しい晚餐会は終了した



☆ 第8回登山研修会

「雪山を楽しもう in 往生岳・杵島岳」

担当 加藤 明

杵島岳は草千里ヶ浜火口の北側に位置する円錐形の山で、山頂には直径250m、深さ60mの火口跡がある。また、東側中腹にも大鍋火口の中に小鍋火口があり、典型的な二重火山が一目できる。その北東の方向にも山容が良く似た往生岳が連なり、樹木の少ない展望が素晴らしい山として知られている。冬の登山は積雪も少なく、風がなければ快適な冬季登山が楽しめる。今回は、積雪や凍った路面の滑りやすい登山路での歩行や、アイゼンワーク等を実技研修を行う。又、ピッケル又はストックワークの基本的な方法を習得する。また、アクシデント等の対処の仕方について研修する。

1. 期日 平成25年2月3日(日)
2. 場所 阿蘇 「往生岳(1238m)」・「杵島岳(1326m)」
3. 研修内容 冬期登山の楽しい歩き方・アイゼン装着歩行・ストック(ピッケル)の利用方法・その他冬季における装備とその利用方法
4. 日程(コース) 崇城大市民ホール⇒大津駐車場(8:50)⇒立野弁当店⇒ファームランド⇒草千里駐車所(9:40)準備体操後(10:00)出発～杵島岳山頂～往生鞍部(昼食)～往生岳山頂～東側牧道～旧スキー場(旧古坊中)(バス乗車)⇒熊本(17:00)解散
5. 参加者 工藤文昭・松本莞爾・廣永峻一・加藤稜子・石井文雄・加藤明・安場俊郎・北里 公子・原田栄作・中林暉幸・木曾萬喜治・田北芳博・宇都宮信夫・千々岩泰子・橋本悦子・江島博之・松島義幸・渡辺暁美・金山春男・山本直・原田久子・東 周司・巢山のり子・正木 勝・迫 健太郎・平方英子・富樫泰子・浅井寿子・弥頭信児・富永謙一・大塚香穂里・安武てつ子・迫 文子・三角苑子・松本絹江・東 晶子・田尻正典

行事名の「雪山に登ろう」とその研修に臨んだのはよかったが、2月の厳冬期とは思われない暖かな一日となった。まったく雪は無く、春の野山に登った感じでした。

風もなく寒さを感じないどころか、汗ばむ登山日和となってしまう、雪山研修は春山研修会となってしまった。しかし、雲一つない杵島岳と往生岳は快適そのものでした

往生岳からの下りでは若干、苦労はしたものの、古坊中の駐車場まで体力を持って余しながら下山。予定の時間より早めの帰宅となった。



☆ 平成25年干支の山

「蛇の尾山」登山

担当 安場 俊郎

蛇の尾山(754.3m)は阿蘇登山道路赤水線の湯の谷ゴルフ場を過ぎると、正面に米塚が姿を現します、その左手下に、東半分は杉林を背負った丘を見ることができます。蛇がうねったように見えることから「蛇の尾山」と呼ばれるようになったといわれています。杵島岳、往生岳、米塚よりも古い火口丘で、西と南部分がなく、下部分は米塚の噴出物に覆われています。通常、登山の対象とはならない山ですが、北の麓には、蛇神社があり、2匹の白蛇がご神体としてまつれており、開運の靈驗あらたかとのことですので、セットで楽しむのも一興かと思われます。蛇神社から主に車道を歩きますが、頂上付近はしばらく急登になります。蛇の尾山から、米塚の風穴や第2米塚のスコリア丘断面を見学し阿蘇の成り立ち等を勉強する。

1. 期日 平成24年3月3日(日曜日)
2. 山域 蛇の尾山(754.3m)2万5千分の1地形図「阿蘇山」
3. バス経路 市民ホール前→東バイパス→大津町生涯学習センター駐車場→赤水蛇神社
4. 登山経路 蛇神社～(車道歩き)～牧野歩き～蛇の尾山頂～米塚の風穴～第2米塚風穴
バス乗車(歩行時間 約4時間)
5. 参加者 工藤文昭・松本莞爾・廣永峻一・加藤稜子・石井文雄・中林暉幸・田北芳博・江島博之・山本直・中田良友・三宅厚雄・三宅久子・井上恵美子・金山春男・安場俊郎・菅隆雄・宇都宮信夫・千原幸子・平島千恵子・坂口眞一・芥川文郎・平方英子・富樫康子・高田典男・安武てつ子・内布陽子・木村文代・吉野栄記・吉野美和子・安場幸代・悦裕美乃・緒方恭子・正源司千歳・西村恵美里

蛇の尾山頂では工藤支部長の講話があり、阿蘇の成り立ちや地形を学ぶ。また、阿蘇独特の溶岩洞を見学、草原の下の溶岩の流れを改めて感嘆する。時間は余裕があり、米塚を廻って、乙姫のペンション村へ草原の歩行を楽しみながら下山する。



平成24年度会務報告

4月15日	平成24年度支部総会	29名
4月22日	第1回森林保全巡視(清掃)登山 「鞍岳・ツームシ山」	9名
5月13日	月例登山「サクランソウを見る会」 阿蘇北外輪山	26名
6月9日～10日	宮崎との交流登山 (向坂山～扇山)	18名
6月16日	平成23年度第1回JAC総会	
6月17日	第8回登山教室「宝満山」	32名
7月28日	全国事務局長会議	1名
8月5日	第7回登山研修会	12名
8月19日	第1回SOアスリート登山教室 「鞍岳～ツームシ山」	17名
8月27日	夏季例会 ビールパーティー	28名
9月9日	第9回登山教室 南外輪山地蔵峠	46名
9月22日～23日	第5回脊梁山脈 トレイルラン	13名
10月6日～7日	第4回脊梁縦走登山 三方山～峰越し	10名
10月20日～21日	全国支部懇談会(千葉)	2名参加
11月3日～4日	宮崎ウエストン祭	11名
11月11日	第1回勤労青少年登山教室 阿蘇外輪 俵山	28名
11月18日	第2回森林保全巡視登山 五家荘 大金峰・小金峰	13名
12月1日	日本山岳会晩餐会	2名
12月16日	海外登山報告会 木曾満喜治会員	27名
12月9日～23日	山の写真展	約500名
1月19日	新年晩餐会	31名
1月26日	全国事務局長会議	1名
2月3日	第8回登山研修会 雪山に登ろう・杵島山	36名
3月3日	干支の山登山・蛇の尾山 米塚・溶岩洞探検	35名
支部報発刊	26号・27号・28号	
支部通信	5月・6月・8月・9月・ 11月・1月・2月・3月	発行
毎月第3火曜日	熊本支部役員会 「わくわくランド」	毎月第3火曜日 13回
その他		
12月～2月	阿蘇高岳遭難行方不明者捜索	述べ13名協力

平成25年度事業予定

4月21日	平成25年度支部総会	
4月27日	第13回森林保全巡視(清掃)登山	
5月12日	月例登山「山野草を見る会」阿蘇	
5月25日～26日	宮崎との交流登山 「龍ヶ岳・念珠・次郎丸」	1泊2日
6月22日	平成25年度第1回JAC通常総会	
6月23日	第10回登山教室「韓国岳」	
6月30日	森づくり事業	
7月20日	勤労青少年登山教室講座	
7月28日	勤労青少年登山教室実技「小岱山」	
8月4日	第9回登山研修会(沢登り編実技)	
8月25日	第2回SOアスリート支援登山	
8月30日	夏期例会(ビールパーティー)	
9月8日	第11回登山教室	
9月29日	第6回脊梁山脈トレイルラン	
10月	第14回森林保全巡視登山	
11月2日～3日	宮崎ウエストン祭	
12月15日	海外登山報告会(映写会)	
12月7日～21日	山の写真展	
1月18日	新年晩餐会	
2月2日	第6回登山研修会九重山(初級編)	
3月2日	干支の山登山「馬口岳」	
支部報発刊	年3回～4回予定	
支部通信	随時	
毎月第3火曜日	熊本支部役員会	
その他	(社)日本山岳会からの依頼 日本三百名山ガイドブック出版 熊本支部担当山城の調査・執筆 熊本支部担当山城(3山)	
	① 阿蘇「高岳」	
	② 五家荘「大国見岳」	
	③ 人吉「市房山」	

編集後記

(社)日本山岳会も公益社団法人とな
って1年の年度が終了した。会計等の
事務処理は大変なものがあるが、支部
活動では公益事業としての意識はある
ものの概ね順調に活動できたものと支
部長は巻頭で述べておられる。会員の
皆さんも意識して参加協力を頂いた。

山岳会の中身が変化したと感じられ
る方もおられるが、これも時代の流れ
か?・・・これで支部の活性化が図ら
れ、社会貢献が軌道に乗れば幸いです。